

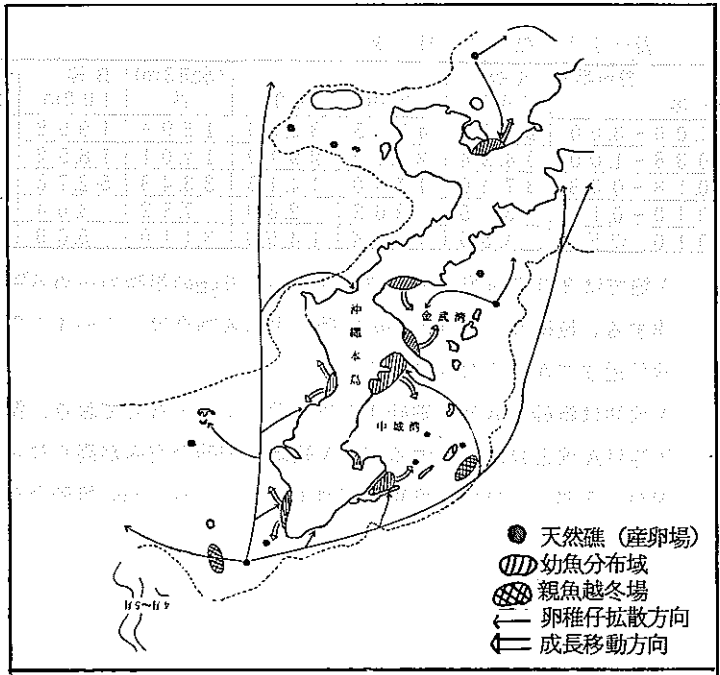
### Ⅲ 栽培漁業の展開

ハマフエフキの産卵生態

図-2.0 産卵生態、幼魚生態模式図

幼魚生態等の諸特性を図-2.0に示した。

産卵場とみられる海域は各地にみられ、また幼魚分布域も同様にあるが、特にその分布量は沖縄本島東側海域に多い。しかし西側海域での調査は殆んどなされてなく、また幼魚の混獲される建干網等の漁業が少ないためにその実態は明らかでない。しかしながら西側海域には産卵場もかなりあり、また喜屋武沖産卵場に由来する卵稚仔の輸送もみられることからこの海域の幼魚生息場もかなりあるものと予想される。



幼魚・成魚ともその成長に伴う移動・産卵・越冬のための移動範囲はかなり小さく、湾内または湾外の100m以浅の水域であり、栽培化に当っては地先型栽培化方式の展開が必要であろう。漁業生産をみると県全体で200トン前後と推定され、近年は横這い状態にある。漁業種類別には延縄が最も多く50~90%を占め、その他刺網、追込網、一本釣等により漁獲されている。

また、当海域では幼魚を対象とした漁業はなく建干網等により僅かに混獲がみられる程度であり、栽培化に当って、幼魚資源に与える影響は殆んどないと思われる。このような背景のもとで漁業生産の増大を期待するには対象魚種の生物特性と海域の漁場環境特性を生かし、天然の生産力の有効利用によって資源を培養し、漁業生産力を高めることが必要である。そのためには人工種苗放流による補充添加、種苗放流場および幼魚生育場の保護造成、若魚および回収漁場の造成等の諸施策を総合的に実施するとともに、保護水面、育成水面を設定し、漁獲制限、埋立、汚染等の防止、また産卵親魚の保護の立場からの産卵期における産卵場での漁獲禁止、制限等の漁場資源管理体制の確立が必要である。そのためには地先漁協への啓蒙、指導、協力体制作りを強力に推進しなければならない。

#### 栽培化の方法と施策

##### 1. 天然種苗の保護育成と漁場造成

天然の幼魚はサンゴ裾礁内水域の着底場を生育場として1才魚(20cm前後)までこの

水域に滞留する。この水域は、リュウキュウスガモ、ニラアマモ等の顕花植物、センナリゾタ、ホンダワラ（夏期）、フクロノリ、カゴメノリ（冬期）等の藻場を形成する。このような藻場は幼魚の生息環境、餌料環境等の面から好適な環境要因になっているものと考えられ、幼稚魚の保護策として藻場の造成が最も効果的と思われる。また、これと並行して培養魚礁としての柴付礁、ヒューム管魚礁の投入も効果的であろう。このような施策実施水域としては、図-21に示すとうり、中城湾の湾奥部、知念岬の南側水域、金武湾の屋嘉、天願水域、糸満から喜屋武岬の水域、羽地湾の沿岸水域、北谷沿岸水域があげられる。また育成水面設定による漁場資源管理体制の充実に計る必要がある。その水域としては中城湾の湾奥部、知念岬南側、羽地湾沿岸水域があげられる。

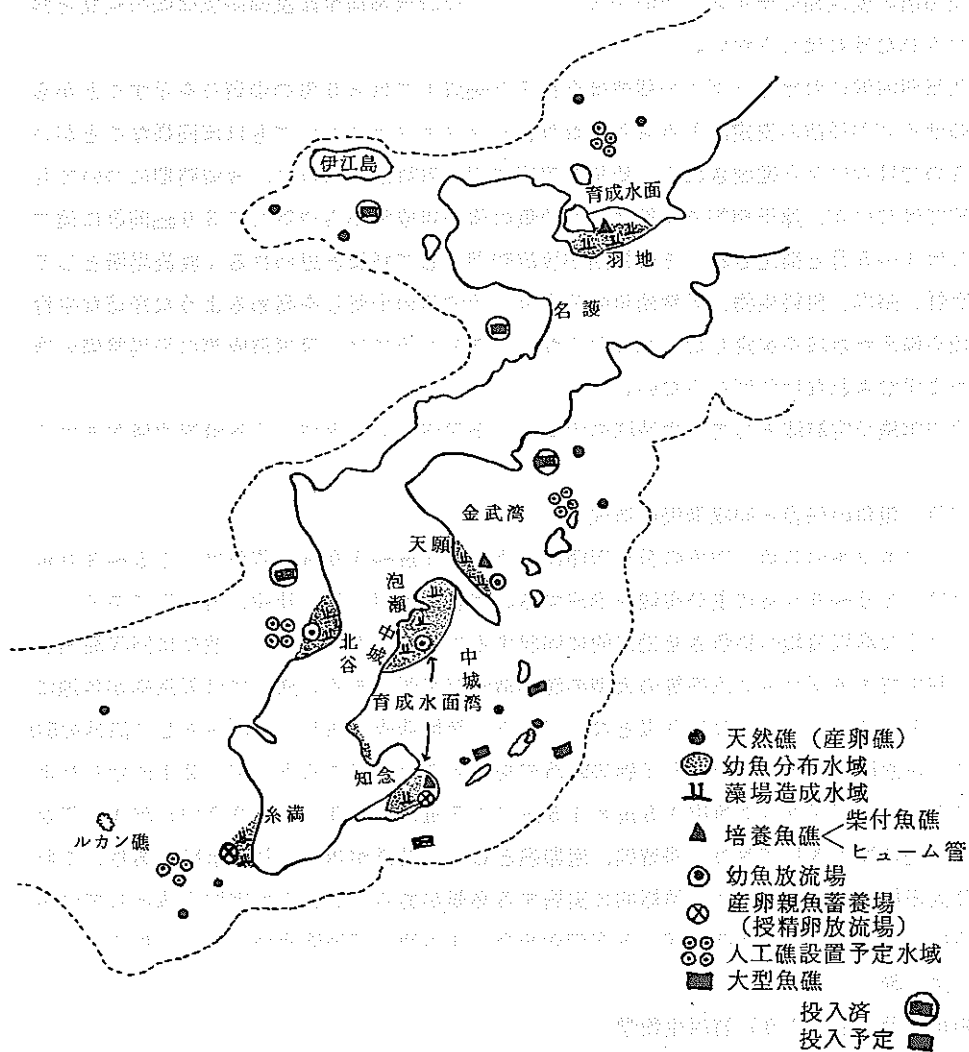


図-21 保護育成と漁場造成模式図